

# この島に生まれ育った 自分にしかできない活動を

鵜来島



宮本 五 (みやもと あつむ)

昭和50年に島の中学校を卒業後、6年間カツォ一本釣り漁船に漁師として乗る。漁業経営の不振から島を離れ、30年ほど大阪で塗装店に勤務。平成24年4月から地域おこし協力隊として帰島。



恋月岬からのぞむ鵜来島の集落と港。

## ◆自分に何ができるか不安と希望からはじまった

鵜来島は小さな島で、人口も現在では二三名ほどとなりましたが、住民は島独特の自然や文化の中で暮らしています。島には平地がほとんどないため、車は一台もなく、住民は海辺の斜面に石垣を築き、家々はこの石垣の上に立ち並んでいます。近年は空き家が多くなり、島の家の四分の三近くは空き家となっています。

この空き家のうち、状態がよくて持ち主に了解を得られた家二軒を民泊できるようにして活用しています。

島には、釣りやダイビングをする人たちが、年間を通じてたくさん訪れます。昨年の夏には高知県西部の六市町村が共同で開催した「楽しまんとーはた博」のイベントの中で、鵜来島の休日を楽しんでもらおうと、シュノーケリングをしにやってきた人たちに、島のおばちゃんたちが島ごはんをつくっておもてなしをしました。

島の人たちは、七割が七〇歳以上で、六〇歳未満は三人しかいません。私もその三人の



高知県宿毛市の沖合23kmに浮かぶ周囲わずか6kmの小さな島。

うちの一人で今年五五歳ですが、島でいちばんの若手です。私は、昭和五〇年に島の中学校を卒業後、六年間カツオ一本釣りの漁船に乗り込みました。当時は島から六隻のカツオ船が出ていて、私も自然と漁師になりましたが、その後カツオ一本釣りの経営が厳しくなり、一隻ずつやめていきました。最後の一隻となった私の船もとうとうやめることとなり、私は好きな島を離れることになりました。

その後は、親戚の塗装店に勤めるため、島を離れ大阪に移り住みました。

大阪で三〇年近く働いてきましたが、年々仕事も減り、職安へ行くこともありました。そんなあるとき、島の地区長の田中さんから電話をいただき、島の現状や島で困っていることをいろいろと聞くようになりました。地区長さんは、年々人口が減って高齢化も進み、このままでは無人島になってしまわないかと危惧していました。島のおばちゃんたちの日常生活が難しくなり、定期船で子や孫から荷物が届いても、船から家まで荷物を運べないなど、生活する上で若い人がいないことに大変不便を感じているということでした。島で生きていけないとなると、おばちゃんたちは島外の子どものたちどころへ行ったり、宿毛市内の介護施設に入るなど、さらに島を出ていく人が増えます。「できるだけおばちゃんたちに島に残ってほしい、無人島にしてはいけないと思う」と地区長さんは熱く語りました。

そして私に「島に帰ってきてほしい。それも、島のおばちゃんたちの生活を支援する地域おこし協力隊として帰ってきてもらえないか」と声をかけてくれたのです。

私は、島で何ができるのかということを考えしばらく悩みました。住み慣れた大阪を離れることにも不安がありましたし、数十年も帰っていない島がどうなっているかわからず、自分に何ができるのか不安な気持ちでした。しかし、自分の生まれ育った島が困っていて、島が求めていることがはっきりしていながら、それをできる人がいないという状況に、自分に何ができるかわからないけれど、何かできることがあるのかもしれないと不安半分、希望半分で、地域おこし協力隊としてやってみようと思心しました。

### ◆おしゃべりの中から、やることがみえてきた

島に戻ってみると、自分の知っていたおっちゃん・おばちゃんは、おじいさん・おばあさんになっていて、ふと浦島太郎にでもなったような気持ちでした。

また、地区長さんの言っていたとおり、島のおばちゃんたちは、重たい荷物を運ぶのが大変だったり、雨漏りや電化製品の故障もそのままになっているなど、日常生活でたくさん困っていることがありました。

何をすればいいのか、何ができるのか、そんな思いを抱えながら、おばちゃんたちと毎日おしゃべりをしました。



おばちゃんたちのおしゃべりがとても大切な時間だ。

その中で少しづつやるのがみえてきたのです。

おばちゃんたちは、現在は「ミニ・デイサービス」などで使用している旧小学校前のベンチに毎朝集まってきます。集まっておしゃべりをしたり、集会室で演歌を聞いたりして午前中の時間を過ごします。私は、おばちゃんたちと一緒に話して、今日も元気が確認します。

島には市営定期船が日に二回やってきます。船から荷物を受け取り、大きな荷物であれば、みなさんのお宅に運ぶのも私の仕事です。

このほか、古い家の管理をしたり、草刈りをしたり、月に二回やってくる保健師さんの健康相談や月一回の無医地区診療のお手伝いもしています。

また、島の見まわりをして困ったことがないかアンテナを張るようになっています。

私は、もともと塗

装業でしたから、家の修理やペンキを塗ったりする仕事は得意でしたが、テレビが映らないとか、水漏れなども、わかる範囲でみてまわりました。私でわからないことは、宿毛市内の業者さんをお願いするわけですが、業者の方に出張して来てもらうにしても、こちらから物を定期船で市内に運んでなおしてもらうにしても、お金も日数もかかりますので、私ができる範囲では、みてあげたいと思っています。

そうした中から、地域おこし協力隊としての任期を終えたあとも、島で生活していく新しい道もみえてきたような気がします。民泊のお世話や、定期船の荷物や郵便物の配達、養殖の仕事など、現金収入につながるような仕事も徐々に目途がついてきました。

#### ◆期待と責任のはざままで自分らしい暮らしを発見

ただ、島に住むことで大変なこともたくさんあります。いちばん大変だったのは、帰って一年目の冬の早朝のこと、ある家のおじさんがいないと大騒ぎになったことがあります。みんなで懐中電灯をもって、集落や海辺を探しました。高齢者ばかりなので、海辺は私が見まりました。うつすらと明るくなった頃、いちど見まわった船着き場あたりの海に人らしき姿をみつけました。私はあわてて海に入り、陸に引き揚げて処置をしましたが助けることはできませんで

## 受け入れ側からみた隊員の活動

### ●島の現状

鵜来島は、戦後の活気にあふれた時期の人口は400人あまり、主な収入は、カツオの一本釣り漁で、6隻の漁船が操業していて、豊かな生活とはいえませんが、力をあわせて暮らしていました。

その後、漁業の不振により、いまでは小釣り漁船1隻で15世帯22名、それも平均年齢76歳という高齢者です。皆、なにかと持病を抱えながらも「死ぬまで元気、楽しく生きよう」を合言葉に、生まれ育った島に思いを寄せていますが、毎日畑を耕したり、磯で貝をとることを生きがいとしていたおばさんたちも、いまは離島センター（旧小学校）で好きな演歌を聞いて過ごす時間が増えてきました。何より不安な気持ちになるのが、最近耳に入ってくる話に「煮物をしていてうっかり鍋を焦がした」「夕べ血圧が上がって頭がふらふらして薬を飲んで寝た」「玉ねぎをとって帰るとき畑の石につまずいて足を打った」といった内容が増えてきたことです。

### ●隊員の活躍

そんなとき、地域おこし協力隊の存在を知り、島出身者の宮本さんに声をかけたところ、島への熱い思いをもって、隊員として帰ってきてもらえることになりました。活動を始めるとすぐに、明るい人柄と誠実さ、それに地元出身ということで住民からも受け入れられ、「玉ねぎ運んで」「ここ修理して」「夕食を食べに来て」など声をかけられています。住民は物的にも精神的にも安心して暮らせるようになりました。

最初は不安そうだった彼も、やがて朝6時と夕方7時の2回、雨の日もおばちゃんたちの家を見まわってくれています。また、長年窓を開けることなくなった数十軒の家をみながら、「そのままにしていたらお化け屋敷になる」と、窓の開け閉めから、修理に掃除と手を掛け、去年の夏からは2軒の家を民泊として利用し始めました。いまでは、家族連れに人気となっています。

### ●これからへ向けて

〈無人島〉という言葉が現実になりつつあることを感じていたのは、私だけではないと思いますが、今回島を愛する若者が帰ってきてくれたことで、住民に安心と安らぎを与えてくれたと思います。島が求めていたことを、地域おこし協力隊というかたちで実現できたことに、地区長としてほんとうによかったと感じています。住民の生活支援をしながら島にいることは、無償ではなかなかできないことですが、宮本さんには、地域おこし協力隊という立場で活動することで、自分の仕事が鵜来島の将来につながる価値のあるものであるということを感じてもらえていると思います。

そして、任期が終わったあとも島で暮らしていけるよう、民泊の管理を仕事にすると、家の修理を仕事にしていくとか、いまの活動を収入につなげていくことができるようサポートしていきたいと考えています。

（高知県宿毛市沖の島地区長 田中辰徳）

した。その後の対応は、地区長さんと警察に任せましたが、そのときの恐怖感はいまだにぬぐえないままです。ほかにも、島での生活が重荷と感じることも多々あります。いま、島で動ける若い人というと、地区長さんと連絡所の田中さん、そして私の三人です。この三人だけでは、この先大変になることもあると思います。用事があっても、何日も島をあけることはできません。仕事とプライベートを完全に分けることができないのです。期待されている反面、責任の重さにつぶされそうになり、大阪での生活が思い出されることもありました。

しかし、島に戻ってからの日々は、いちばん自分らしい暮らしなのではないかと思っています。人と接することが好きで、生まれ育ったこの島が大好きですから、自分しかできない生き方だと思っています。またこの先は、島外からの移住者に一人でも来てほしいと願っています。一人また一人と島に住みたいと思っても、もらえるように、魅力的な島にして、受け入れ態勢を整えていきたいのです。鵜来島に地域おこし協力隊として帰島したことは、自分の人生を変える一大事だったとあらためて思います。